

故池田大作氏へのオマージュ

ミナス・ジェライス州連邦大学心理学科

哲学・人間科学部

2023年11月15日、平和主義であり、教育者であり、仏教の指導者であり、混とんとした世界情勢において世界平和のために貢献を続けられていた池田大作氏が逝去された。享年95才、日本でその生涯を閉じられた。

1980年代初頭から池田氏は世界中を旅し、文化、科学、宗教、政治の分野の実力者と対談を重ね、人間である以上摩擦や意見の相違は避けられないが、戦争に関してはその旨ではないと訴え続けてこられた。戦争を避けることは可能であり、戦争は避けなければいけない — 人間として精神を高めることは、文化や科学の進歩に不可欠である。 — 池田氏は世界中の文化人や政治家と対話を続け、その内容を記した著作を多く残されている。

池田氏は、現代は多様化に向かっており、混とんとした状況に向かいつつあることを認識していたが、人類が一つになるためには抑圧と偏見を生み出す植民地主義が及ぼした近代文明への影響とその「閉じた箱」内部で展開しつつある近代の普遍主義を超越する必要があると提言した。

池田氏はこの普遍主義がおのおの理論を鈍らせ、絶対的倫理に背を向け、実体験を軽視する元凶であると説いている。他人への冷淡さや、不正義に対する鈍感さ、日々の矛盾に対しての無関心により非人間的な文化が形成されてしまったという。

池田氏は、科学、文化、政治にかかわっている人々とその英知を集結し、「大いなる普遍」を実現のため絶え間ない努力を続けてこられた。

冷戦の時代においても、世界から非難を受けながらも池田氏は何十年にもわたり、日中関係正常化に努力を惜しまず、世界が中国を孤立させてはならないと訴え続けてきた。そのために日本で政党の創立を支援し、また日中間の大学交流プロジェクトを実施した。戦争の危機が差し迫った時期においては、周恩来氏（1974年中国首相）、鄧小平氏（1974年、1975年中国副首相）、ヘンリー・キッシンジャー氏（1975年米国国務長官）、ミハイル・ゴルバチョフ氏（1990年から2001年ソ連大統領）と対話を行った。また、ラジブ・ガンジー ラジーヴ・ラトナ・ガンディー氏（1985年インド首相）、フィデル・カストロ氏（1996年キューバ大統領）、マーガレット・サッチャー女史（1989年英国首相）、ネルソン・マンデラ氏（1990年と1995年南アフリカ大統領）、その他多くの公的機

関関係者とも歴史的対面を実現させた。

ブラジルでは、1993年に当時ブラジル文学アカデミー協会の総裁であるオースレジーロ・デ・アタイデ アウストレジェジロ・デ・アタイデ氏との対談が実現し、『21世紀の人権を語る』を刊行した。そして池田氏は同会の在外メンバーとして任命されている。

2005年にはブラジルの天文学者ロナルド・ロジェリオ・デ・フレイタス・モウラン氏との対話集、『天文学と仏法を語る』を刊行した。また1975年にブラジルの詩人チアゴ・デ・メロ氏と、1992年にピアニストで指揮者のアマラル・ヴィエイラ氏と対面、現在に至るまで親交を深めていた。

池田氏は特にブラジルに注目し、「大いなる普遍」を実現する可能性を見出していた。池田氏は教育者牧口常三郎先生の教育原則を重視した小学校をサンパウロ市に開校、その他アマラル・ヴィエイラ氏が率いる青少年フィルハーモニー管弦楽団、1990年代には CEPEAM（アマゾンの環境調査研究センター）（自然保護施設と考古学的遺跡は最近、創価アマゾン研究所と改称）を設立した。

池田氏は世界中のさまざまな国々を訪問し、現状の困難を模索し、独自の民族性、文化的背景と政治的情勢を見据えながら、世界平和を実現するためそれらの国々に支援をつづけていた。

池田氏が行った対話の中で特筆したいのは、1972年から73年にかけての、イギリスの歴史家アーノルド・トインビー氏との、第二次世界大戦後の世界秩序の再編成とアラブ民族の要求に耳を傾けることの緊急性についての対話である（参照 『21世紀への対話』）であろう。1975年のイタリア人アウレリオ・ペッチェイ氏（ローマクラブの創設者）との生産社会についての対話は『21世紀への警鐘』に記述されている。1974～75年のルネ・ユイゲルネ・ユイグ氏（心理学者、フランス・アカデミーの美術評論家）との対話は『闇は暁を求めて』、英国の宗教社会学者ブライアン・ウィルソン氏との対話は、『社会と宗教』として刊行されている。スリランカの天文学者チャンドラ・ウィックラマシンハ チャンドラ・ウィックラマシング氏との天文学の原理と仏教の世界観との関係についての対話は、『「宇宙」と「人間」のロマンを語る』として出版された。世界中の39名の著名人との対話の中から、数ヶ国語に翻訳されたものが出版に至っている。忘れてはならないのは1995年に行われたアルゼンチンのノーベル平和賞受賞者アドルフォ・ペレス・エスキベル氏との対話集『人権の世紀へのメッセージ 第三の千年に何が必要か』という著作である。マニフェスト『世界の青年へ レジリエンスと希望』（2018年にローマで発表）は二人の共著である。

高等教育分野では東京に創価大学を創立した。アメリカ合衆国に分校を開校し、常に現代に沿った技術、知性、人間性を総合的に育成する教育機関を提唱している。

近年注目されているのは2030年への持続可能な開発目標（SDGs）における教育分野への

取り組みだ。学生指導への指針として活用、世界中の学生との交流を推進している。日伯関係においても創価大学とは、ブラジル東北地域の連邦大学、パラナ州連邦大学、ミナス・ジェライス州連邦大学と学術提携を結んでいる。

池田氏は19才の若き時代、己が探索していた自己実存と、クリスチャンである敬愛していた友人との決別の苦しみを公式によく語っていた。のちに、互いに相違する人生を歩むことになった結果であったが、別れは表面的なものでしかありえず、心の痛みも人生への愛も不変なものであると確信できたという。

友人との決別と自身の進む道を決定したのは日本の森ヶ崎海岸であったという。その海岸は、平和と人道主義に命をささげた偉大な人物がその一步を踏み出した象徴となり、その影響は全世界に広がって言えるであろう。現代の多くの問題や課題に立ち向かう多くの人々がそれぞれの道を進み、解決の答えを探し続けている。

池田大作氏の死は、ナルシズム主義と不寛容性の時代において計り知れない損失である。しかしながら、池田氏の不在は、我々に平和確立のためにさらなる決然とした行動をおこすことを課題として突きつけているのではないだろうか。

ミナス・ジェライス州連邦大学の大学評議会において哲学・人間科学部心理学科から池田大作教授に名誉博士の称号を授与を決定し、池田氏もその旨を承諾していただいていた。残念ながら実現には至らなく、痛恨の思いと哀悼の意を捧げ、このオマージュとする。